

基本方向2 英語を活用しグローバル社会に生きる子どもの育成

基本方針5 国際社会に絆を広げるコミュニケーション能力の育成

現状と課題

社会の^{*}グローバル化が進む中、国際社会で能力を発揮するためには、問題解決能力や新たなことにチャレンジする姿勢のほか、国境を越えて人々と協働・共生するためのコミュニケーション能力を身に付けることが不可欠です。

そのため、活用できる英語を確実に習得できるよう教育課程特例校の指定を活用して、小学校では「聞く」「話す」に加え「読む」「書く」にも重点を置き、^{*}カリキュラムなどの工夫を凝らして活用性の高いコミュニケーション能力の素地や基礎の育成をはじめ、英語の教科化への対応を進めます。

また、中学校では厚真プロジェクト学習（仮想英語空間による厚真PR学習（APR））など多様な実践的カリキュラムに工夫を凝らし指導の充実を図り、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4領域のバランスのとれた習得を促し、コミュニケーション能力の基礎の育成に取り組みます。

施策の方向性

- ◆児童生徒が外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさや大切さを実感できる授業の充実を図るために、厚真町英語教育推進委員会を中心に小・中学校の連携したカリキュラムづくりや指導の工夫に努めます。
- ◆児童生徒が、自然に、かつ積極的に外国の人々とコミュニケーションを図り、受信した外国語を理解し、自らの考えなどを相手に伝える発信力の習得に努めます。
- ◆英語教育先進地の教育活動を研修し、児童生徒の興味関心を高め、コミュニケーション能力の育成を進めます。
- ◆^{*}ALTの有効活用を図り、コミュニケーション能力の素地や基礎の育成と国際理解教育を進めます。
- ◆海外などとの多様なコミュニケーション機会の確保を図り、英語を活用できる児童生徒の育成に努めます。

主な施策

(1) 国際社会に生かせるコミュニケーション能力の育成

◇厚真町英語教育推進委員会を中心に「厚真町の夢のある英語教育～英語を活用できる児童・生徒の育成～」構想の下に、義務教育9年間でコミュニケーション能力の素地や基礎の育成を進めます。

- ◇小学校第1学年から中学校第3学年までに、文部科学省の教育課程特例校制度を活用して授業時数の確保と、小学校ではモジュール^{*}の時間を活用したEタイムの実施で外国語への慣れ親しみを育て、小学校第5学年から中学校第3学年までにはコミュニケーション科を設け、小・中学校のスムーズな接続を図ります。
- ◇小・中学校では多様なカリキュラムの開発を行うとともに、小学校では「聞く」「話す」に高学年では「読む」「書く」を加えて4領域の力をバランスよく育成しながら、英語への興味・関心や意欲・態度を育てコミュニケーション能力の育成を図ります。
- ◇小学校高学年では「プロジェクト学習」や中学校では「あつま学」としてAPRなどを実施し、多様なコミュニケーションの機会を設けます。
- ◇イングリッシュキャンプ^{*}などの実施や連携に努めます。
- ◇米国シェリダン校との多様な交流^{*}を図り、活用性の高いコミュニケーション能力の育成と異文化理解に努めます。

(2) 国際理解教育の推進

- ◇国際感覚を養いコミュニケーション能力を培うためには、広い視野を持ち、異文化を理解し、これを尊重し積極的に他者と関わる態度が求められることから、国際理解教育の充実を図ります。
- ◇異なる文化をもった人々と共生する資質・能力を養うため、異文化との双方向を含め多様な交流会やコミュニケーション機会の充実を図ります。

(3) 歴史や伝統・文化に関する学習の推進

- ◇厚真町や日本の歴史や文化・遺産に理解を深める学習を通して、ふるさとの魅力を自覚し、コミュニケーションの領域を広げ国際性を養います。

(4) 外国語指導助手（ALT）の効果的な活用

- ◇児童生徒が異文化に触れ合いながらコミュニケーション能力を高めるために、小・中学校のALT配置を継続します。
- ◇ALTの研修を充実し、コミュニケーション能力の指導力の向上を図ります。

(5) 海外への修学旅行を活用した英語教育の検証

- ◇小学校英語の教科化に向けて、教育課程特例校による英語教育の成果と課題を検証し、活用性の高い英語教育のさらなる充実を図るため、家庭や関係機関の理解と協力を得て、海外（米国）への修学旅行による検証の実現を図ります。